法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-10

特集 ： 地域における地理学の役割 ： 博物館・市町村史の中の地理学 ： 自治体史における自然的基盤の地理的・歴史的把握について ： 「村史　千代川村生活史　自然環境編」を事例として

SATO, Teruko / 佐藤, 照子

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
31
(開始ページ / Start Page)
38
(終了ページ / End Page)
42
(発行年 / Year)
2000-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025768

〔法　政　地　理
J. Geogr. Soc. Hosei Univ.
31. p 38—42. (2000. 3)〕

自治体史における自然的基盤の地理的・歴史的把握について
——「村史　千代川村生活史　自然環境編」を事例として——

佐　藤　照　子

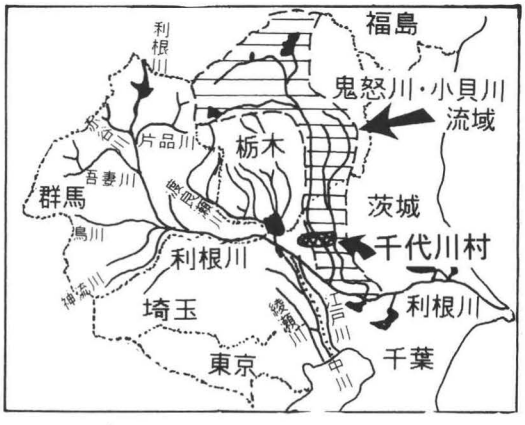
Ⅰ　はじめに
Ⅱ　千代川村の自然的基盤の特性
Ⅲ　対象自治体史概要
Ⅳ　まとめ
Ⅴ　自治体史と自然環境

Ⅰ　はじめに

地域の自然は人々が生活し，そして生産する場であり，余暇を楽しむ場でもある。本稿では，この自然的基盤が，地域の歴史を編む自治体史において，どのような視点で描かれているのかを，著者が関わった「村史　千代川村生活史　自然環境編（1998（平成10）年刊行）」を事例に報告をする。千代川村では，「地域に即し，生活に即する」ことを理念とする新しい視点からの村史づくりが進んでいる。

Ⅱ　対象自治体史概要

千代川村は関東平野の中央部，茨城県南西部に位置する人口9,537人（1997年1月現在），面積19.83km^{2}の村である（第1図）。千代川村は「村人の祖先の生活がにじみ出てくるような村史」を作りたいと，歴史学者木村礎を監修者に迎え，村史編さん事業を1992（平成5）年に開始した。木村は「どの地域でもそれぞれ個性的な問題を抱えつつ歴史を経過してきており，市町村史はその個性を書くため，すなわち，あくまでも地域に即し，村民の生活の歴史を描くために存在している」とし，千代川村史を『村史　千代川村生活史』と命名した（村史編さん委員会，1995）。木村が示した村史編さんの考え方に基づき，村史は本編6巻，目録集3巻，報告書2巻の構成とし，そのうち本編は第1巻自然環境編，第2巻地誌編，第3巻前近代資料編，第4巻近現代資料編，第5巻前近代通史編，第6巻近現代通史編とすることが決められた。新たな調査手法も取り入れた村史編さんが2001（平成13）年完成を目途に始まった。



第1図　千代川村位置図

本稿で対象とするのは，地域の自然的基盤の特性が記述されている第1巻自然環境編の第1章「千代川村の土地環境と河川」である。なお，この章を著者が担当した。

Ⅲ　自治体史と自然環境

1．地域の自然と人間

第1巻自然環境編で，地域の自然と人間が取り上げられた。監修者木村は自然環境編の基調を「自然と環境についての諸問題を人間生活との関連においてとらえること」とし，編成に当たっては(1)自然環境の変化を重視し，それらの(2)人文学的把握に努めるとともに，(3)各問題を広い視野にたち，広域的・巨視的立場から位置づけるとの基

本的考え方を示した。それに沿い，自然環境編を自然環境編と歴史環境編とに区分し，自然環境編では1章で地形・地質等を，2章で動物，3章で植物を，歴史環境編では第4章で原始・古代・中世の環境を，第5章で近世の環境を扱うことが決められた。このように，第1巻自然環境編では，自然的基盤の特性だけではなく，その景観の歴史的な変化，人々の生活と動植物との関わりも取り上げられた。地域の自然的基盤の特性を扱った章は，自然環境編の冒頭，第1章におかれた。

千代川村史で描こうとする自然は，人間生活とつながり深いものとして扱われ，これは自然を自然現象としてだけではなく人間との関わりにおいて総合的に捉えようとする自然地理学的な見方とも通ずるものである。

2．自然的基盤の特性と村史

著者は自然的基盤の特性を内容とする第1章の役割を，村史の中だけではなく，活きた形で，村の人に(1)自然環境の持つ性質や自然現象についての基本的な情報を伝え，地域の自然への理解を深める手助けをするものであること，そして(2)地域の自然環境の将来，さらにはグローバルな環境問題への関心を喚起するきっかけとなるものを提供することと位置づけた。第1章がこの役割を果たすためには，自然現象を客観的に記述するだけでは不十分で，自然環境の持つ歴史性，地域性・個別性，不確定性についても，出来るだけ千代川村とその周辺のデータを用い，千代川村を意識し，地域の事例に基づき伝えることが重要であると考えた。

ここで言う「歴史性」とは，自然環境が人間の働きかけに反応してダイナミックに変化することを意味する。人間は自然に手を加えその恵みを生産や生活に利用し，生命や財産への自然の猛威を制御し，緩和させ生命財産を守る工夫をしながら生活してきた。現在の土地や河川そのものが，本来の自然そのままの状態ではなく，人間と自然との関係の中で改変され，時代とともに変化してきた歴史的所産として存在している。かつては，人間は自然と上手に共存してきた。しかし，工業化の進展やより快適な生活を求める要求等が大規模な自然開発を加速し，その結果災害現象が激化し，地球環境が悪化するなど，私たちの生活の場にも脅威がおよび始めた。今，人間と自然との関わりを問い直すべき時代に来ている。

本報告で「地域性・個別性」というのは，例えば，同じ鬼怒川でも千代川村周辺と上流の下館周辺とでは河川の様相，その作る地形，治水そして水利用の形態などが異なるし，同じ千代川村を流れる河川でも鬼怒川と小貝川とでは異なる流域条件や水文特性をもち，そして両河川の人間との関わりの歴史は同じでないということである。このように地域を意識し，地域性・個別性を明らかにする一方で，千代川村の自然環境が，茨城県の中で，関東地方の中で，日本の中で，世界の中で，あるいは水系網の中で，河川流域の中でどう位置づけられるのかも重視した。

また，災害の誘因なる異常な自然現象の発生頻度は低く，何時どこで発生するか予測する事は難しいという「不確定」をもつが，猛威を奮い生命や財産に打撃を与える災害現象やその誘因となる気象現象等も生活の重要な背景であり，その特徴を取り上げた。

自然環境編第1章は，地域の自然現象についての客観的な観察・調査等に基づき記述されるが，その現象が上述のように歴史という時間軸のなかで，千代川村を取り囲むさらに広い空間軸の中でどのように位置づけられるのかを常に考えながら作業が進められた。それは，監修者木村が示した村史の理念や自然環境編の基調や考え方を第1章で実現するためでもある。

自然環境編を担当する自然環境部会（部会長：槇本直子）では，自然環境編を多くの村民に読まれ，親しまれる村史にするため，「文章には平易な表現を用い，カラーの図・地図・写真・さし絵等を多用し，目で見て分かるものとすること」との執筆指針を決めた。また，自然環境編の本文を他の巻とは異なるが横組みにするなど，より分かりやすくするために，フレキシブルな編集方針がとられた。

Ⅳ　千代川村の自然的基盤の特性

第1章では，千代川村の自然的基盤の特性を土地環境と水文環境とに焦点をあてて書くこととし，項目を次のようにした。

1)　千代川村の地理的位置
2)　千代川村周辺の気候
3)　千代川村周辺の土地環境と河川
　(1)　土地・河川概要
　(2)　鬼怒川と小貝川
　(3)　大地のおいたち
　(4)　地形環境
　(5)　沖積低地と水害の特徴

この章では，土地環境と水文環境が混じり合う構成となっている。これは，鬼怒川と小貝川の2つの大河川が洪積台地や沖積低地形成の営力として重要な役割を担っており，地形を語るときには河川抜きには語れないし，水害について述べるときには土地環境抜きには語れないからである。この地域の特徴的な地形としての河川を，タイトルにも入れ第1章全体を「千代川村周辺の土地環境と河川」とした。また，タイトルに地形，地質などの用語を用いず土地環境とし，人間との関わりの深い大地の性質について記述するとの意を込めた。

次に，上述の主だった項目をどのように編成し，記述したのかを具体的に述べる。

1．千代川村の地理的位置

千代川村の景観は，関東平野の中央部に位置し，台地と低地からなる平坦な地形によるものであることを，地形区分図，斜め空中写真等を用いて示すとともに，衛星画像を用い千代川村が日本，アジアそして世界とつながることを目で見て分かる形で示した。また，利根川水系に位置づけられる鬼怒川が，かつては千代川村と政治経済の中心地江戸や関東各地とを結ぶ役割を果たし，宗道河岸の繁栄など，地域の生活と経済に大きな影響を与えていたことも記した。

2．千代川村周辺の気候

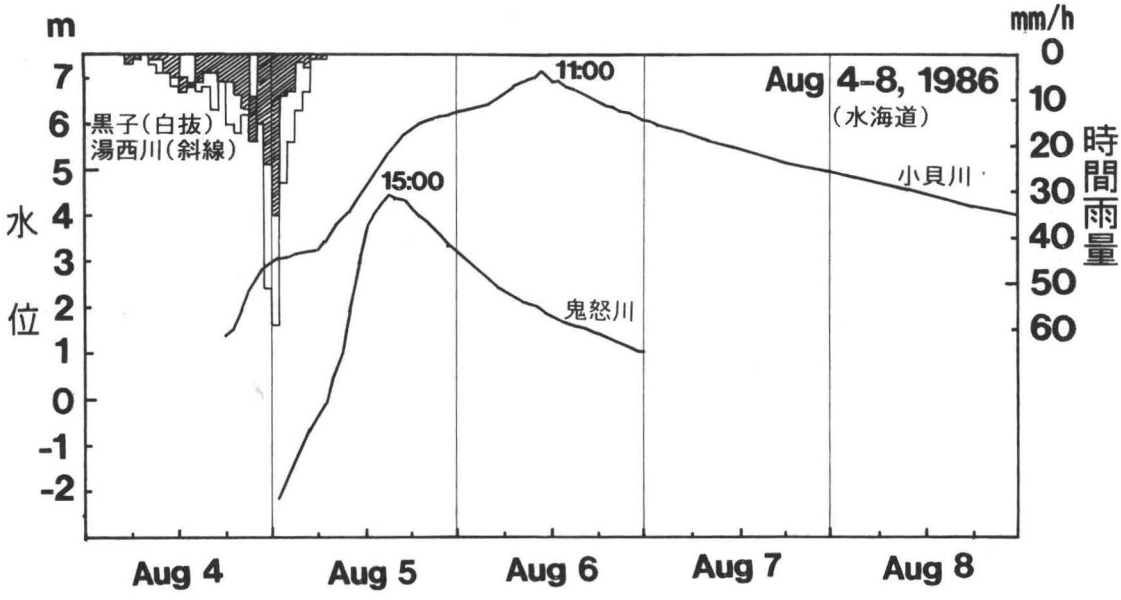
出来るだけ千代川村周辺の気候の特徴を述べることを目標に，千代川村に最も近いアメダス下妻観測所の観測値を有意なデータとして重視した。千代川村の気候は，日本の中では典型的な太平洋岸気候区に属すること，茨城県の中では，他地域に比較し夏と冬との寒暖の差が大きい内陸性の気候を示す地域であることなどを，クライモグラフを用いて目に見える形で示した。また，ほぼ同じ緯度上で同じように平地にある世界の都市の気候を比較し，千代川村の気候の特色を際だたせた。さらに，地域の生活に打撃を与える災害現象の誘因となる豪雨等の異常気象についても記載した。

3．鬼怒川と小貝川

千代川村の地形環境が作られた背景や水利用の背景を知るために，千代川村を流れる鬼怒川・小貝川，2つの大河川の流域条件や水文特性を示した。鬼怒川（流域面積1,760km^2）は2,000m級の急峻な山地を水源とする急流河川で，流域の65%は山地で水量も豊富である。一方，小貝川（流域面積1,043km^2）は標高150～200mの丘陵を水源とし，その面積も流域のわずか10%の平地河川である。小貝川は緩勾配で流れが緩く，流量も鬼怒川ほど多くないため，江戸時代の技術力でも取水堰を築くことが可能であり，用水河川としての利用が進んだ。一方，鬼怒川は流量が多く，自然堤防区間では堀込河道であるため，大規模な取水施設はなく，舟運路としての利用が進んだ。

河川の個別性を伝えるために，隣り合う鬼怒川と小貝川の洪水流量には大きな差やあることや，両河川の出水は洪水到達時間が異なり鬼怒川では洪水の出足が早く，小貝川の増・減水は緩やかであることを実際の洪水（1986年8月洪水）の水位曲線（第2図）を用い示すとともに，この出水時間差を利用して小貝川破堤による氾濫水を鬼怒川に排水した例なども紹介した。

自然環境が人間の働きかけに反応してダイナミックに変化することは，次のような事例を通して伝えた。千代川村周辺の低湿地では，豊かな穀倉地帯に変わり，水害が減り，生活は安全で豊か



第2図　鬼怒川，小貝川の1986年8月洪水水位曲線
水位：水海道地点　雨量：黒子，湯西川

になってきた。しかし，一方で河川は様々な反応を起こしている。小貝川では，同じ規模の降雨に対して，より大きな洪水ピーク流量が発生するようになり，治水の計画規模が改訂されている。この主要な要因は，圃場整備に伴う排水路整備，治水工事による河道直線化や堤防建設等が雨水流出を早めたことにある。また，本来土砂生産量が多く，かつては河床が上昇していた鬼怒川であるが，現在は河床が低下傾向を示し，取水困難になったり，橋脚底部が洗掘されたりしている。これは，上流山地の砂防ダム群や多目的ダムでの土砂貯留や高度経済成長期の川砂利採取が相まって下流への土砂供給量が減少したことが主な原因である。

「沖積低地と水害の特徴」の項では，千代川村周辺の沖積低地で発生する水害の最近の傾向や，降雨条件と発生する水害のタイプとの違い，微地形と浸水被害の様相との関係を示した。水害時の衛星画像や空中写真で，低地や千代川村が浸水している様子を示し，低地が本来水害の危険地帯であることを示した。鬼怒川と小貝川の治水の歴史にもふれた。

なお，低地の河道変遷は第2編の歴史環境で古地図や絵図等を用い説明された。

4．大地のおいたちと地形環境

大地のおいたちでは，千代川村が展開する常総台地と鬼怒川・小貝川低地が，鬼怒川水系の河川の営力により，グローバルな環境の変化と関わって作られたことを示した。ここでは，沖積層の基底等高線図，地質横断面図，地質横断柱状面図，土壌図，露頭の写真等と用い，目で見て分かりやすい形で書いた。

地形環境については，地域に即してその特徴を記述するために，千代川村周辺の地形分類図を作成した。地形分類図に加え，地形図，等高線図，地形断面図，土壌図，河川の写真，空中写真等を多用し，説明を分かりやすいものにするよう心がけた。千代川村周辺の土地環境が鬼怒川水系の中でどんな位置にあるのか，鬼怒川・小貝川の流域条件（土砂生産量の違い等）が，この地域の地形の特徴にどのように現れているかなどについてもふれた。

V　まとめ

千代川村史においては，地域の自然的基盤の特性を扱う自然環境編第1章に，「地域に即し，生活に即する」という村史の編集理念を反映させるために，自然を人間との関わりにおいてみる自然地理学的な視点とともに，自然環境を歴史的所産としてみる歴史的学視点が重視され記述された。

この中で，自然現象は出来るだけ千代川村という地域に即して，地域にこだわり記述された。このことにより，少なくとも第1章が村の自然についての理解を深める情報源の一つになったと考える。また，歴史学的視点の導入により，自然環境が人間の働きに対してダイナミックに反応するという特性を伝えることで将来の地域の自然環境や，さらにはグローバルな環境についての関心を深めるきっかけの一つを提供できたのではないだろうか。

謝　辞

千代川村長瀬純一氏，監修者木村礎先生，自然環境部会長槇本直子氏には，熱気溢れる『村史千代川村生活史』編さんの場に立会う機会を与えていただきました。大矢雅彦先生には，自然環境編第1章執筆に際し，貴重なご助言をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

1　千代川村史編さん委員会（1995）：『村史紀要千代川村の生活』創刊号，千代川村，122p.
2　千代川村史編さん委員会（1998）：『村史　千代川村生活史』 第1巻自然環境編，千代川村，421p.